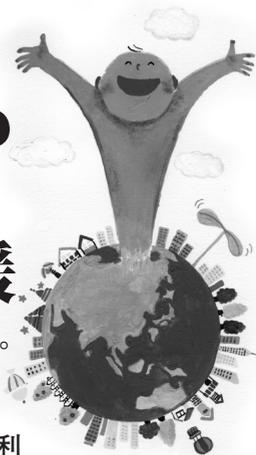


われら地球人 NPO・NGO 奮闘記 第3回

時間をかけて、 現地の人に寄り添う支援

世界を舞台にさまざまな活動に取り組んでいる日本人がいます。この連載では生活環境や文化、考え方の違いに悩みながら、奮闘する彼らの姿を紹介します。

3回目はチャイルド・スポンサーシップなどを展開する特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパンの佐々木貴代さんにお話しいただきました。



ささき たかよ
プログラム・オフィサー

特定非営利活動法人 ワールド・ビジョン・ジャパン 佐々木貴代さん

橋や道路といった、社会の中で大勢の人々の役に立つ社会基盤施設を造りたいという希望があったので、大学では土木工学を専攻していました。しかし、国際支援はもちろん、「海外のインフラ整備のニーズ」といった視点も持っていませんでした。「海外」を意識したのは大学3年生

くらいするとき。当時、国連難民高等弁務官を務めていた緒方貞子さんがTVのインタビューで、国際社会において日本にもっと積極的な姿勢・役割を求める旨のコメントをされていたのを見たことでした。その発言を聞いて、日本社会よりも貧しい途上国の人々のためのインフラ整備に貢献したい、と思うようになり、海外支援ということに興味を持つようになったのです。

さまざまな海外支援を経験

学んできた知識を生かしたいという思いがありましたし、やはり公共構造物の建設などハード面での支援に興味があったので、最初の就職では日本のODA（政府開発援助）のインフラ事業の企画立案を途上国政府と一緒に、国土交通省（旧建

設省)の外郭団体を選びました。

ハード面の支援は規模が大きいため、目に見える成果が大きく、またそれによる変化も大きいのが魅力的でした。例えば、カンボジアで行った時、日本の無償資金協力で整備された国道の交通量が増え、道路沿いの様子も大きく変わり、経済が発展していく様を目の当たりにしました。

しかし、そうした大型インフラ事業に携わっていくうちに、大きな社会的・経済的变化だけではなく、現地の人々に寄り添い、人の変化を感じられるような支援にも関心を持つようになりました。

そこでUNDP(国連開発計画)やJICA(国際協力機構)で、貧困やHIV/AIDS対策、キャパシティ・デベロップメントなど、現地の人々の身近にあるソフト面での支

援事業に携わり、海外駐在も経験しました。ワールド・ビジョン・ジャパンに入ったのは、こうした他団体での活動を経た後の2006年1月になります。

チャイルド・スポンサーシップとは？

ワールド・ビジョンは日本ではあまり知名度が高くありませんが、海外ではよく名前を耳にする団体でした。友人がワールド・ビジョンのスタッフをしていたこともあって、以前からその活動についての知識は持っていましたし、ワールド・ビジョンの特徴である「チャイルド・スポンサーシップ」事業には特に魅力を感じ、1998年からスポンサーとして支援もしていました。

「チャイルド・スポンサーシップ」

は、子どもが健やかに育つ環境づくりを目的とするもので、具体的には、支援を必要とする地域の子どもたち「チャイルド」にスポンサーを募り、月々4500円の支援をいただいで、子どもたちの暮らす地域の保健衛生や教



落花生栽培で収入向上した女性の自助グループを訪問(インド)

育、収入向上支援、農業支援を行うものです。個人に対する金銭的支援ではなく、子どもへの生活環境を向上させていくものですから10年から15年という長い期間、継続した事業になります。これほど長い期間をかけた事業を展開している団体は他にあまりなく、とても魅力的でした。

そこで、JICAの契約期間が終了したとき、ワールド・ビジョン・ジャパンのスタッフ募集に応募したのです。

気持ちの変化に触れる事業

現在はベトナムとインドでの「チャイルド・スポンサーシップ」による事業を担当。現地駐在ではありませんが、担当者として定期的に現地を訪れ、モニタリングやヒアリング、フィードバックなどを行っている

ます。

各地の事業の開始前と終了直前には、特に念入りの現地調査も行われるのですが、各地で行った開始前と終了直前のヒアリングを比較すると、大きな違いが見られます。開始前のヒアリングでは、苦しい

生活に不安を感じながらも、「何が問題なのか」「今後どうしていきたいのか」が分かっていない方がほとんどです。それが、事業終了を控えて行われるヒアリングでは、今後の問題点や希望をはっきりと口にしてくれるようになるのです。

これは以前、タイでの事業を担当



ザオ族の7カ月の赤ちゃんとその家族を訪問（ベトナム）

していたときのことですが、現地の代表者に集まってもらい意見を聞く機会を設けたことがありました。そこに参加していたある女性が、ワールド・ビジョンの現地スタッフを指して「私は、地域のために働いてくれているあの人のようになりたい」と言ってくれたことがありました。

日々の生活に精一杯で、将来を考
えることもできない不安定な毎日
を過ごしてきた女性です。「あの人のよ
うになりたい」という言葉は、彼女
が事業によるさまざまな環境変化に
触れたことで、活動するスタッフの
姿に自分の「将来」を思い描けるよ
うになったということなのです。

教育環境や保健・衛生環境の改善、
家計の向上など、支援による目に見
える変化は色々ありますが、目に見
えない、人の気持ちの変化を引き出
すことは、実は一番難しいことです。
ですから、彼女のこの言葉を聞いた
ときには、「この活動をやってきて本
当によかった」と心から思いました。

自分自身の変化を楽しむ

長い間、こうした支援の仕事に携
わってきて感じるの、社会の中や

家庭の中で自分に求められる役割が
変化していくに従って、支援の現場
へ行ったときや資料を読んだときの
視点が変わってきていることです。

もちろん、UNDPやJICAに
いるときに求められていた役割と現
在の役割が全く違うということもあ
りますが、結婚して子どもを持ち、子
どもの成長を見ている今の私には、
10年前の私だったら関心を持たな

かったであろうことが、とても興味
深く思えたりすることがよくありま
す。

そうした自分自身の内面的な変化
を感じながら仕事をしていくことは、
とても面白いものです。変化を楽し
み、その時々自分に近い人々の
ニーズを敏感に感じ取りながら、自
分に与えられた仕事と向き合ってい
きたいと考えています。

World Vision

この子を救う。未来を救う。

特定非営利活動法人

ワールド・ビジョン・
ジャパン

1987年、国際NGO「ワールド・ビ
ジョン」の一員として設立。キリス
ト教精神に基づき、チャイルド・ス
ポンサーシップによる開発援助、緊
急人道支援、アドボカシーに取り組
む。

スタッフ構成

国内スタッフ 72名

駐在員 5名

連絡先

〒169-007

東京都新宿区百人町 1-17-8-3F

Tel. 03-3367-7251